

西郷は、大恩人で師であり藩主であり、  
まるでレヴェルの違う斉彬に対してでも、  
物の本質に関わる問題については言いなりになっていたわけではない。

仕事の中で、自分が断固正しいと信じたことは正面切って論駁した。  
神のように崇拜し、尊敬していた斉彬に対してさえ「相手の不興」を怖がらなかった。  
ただ、斉彬への意見具申時も、ときとして感情が激し、涙になることがあったという。

また、問題の文久2年、薩藩上洛の是非についての久光からの諮問時も、まずは堂々と反対の論陣を張っている。

その際、斉彬が久光一派に謀殺されたという思い込みから、  
久光に対する恨みが内向しており、  
思わず「ジゴロ」とやってしまったのはいただけないが、  
彼は、相手が久光だから反対したのではなく、  
**どんな尊貴な相手に対してでも、ここ一番の時には、  
是は是、非は非と真向から立ち向かうことのできる「勇気」の持ち主であっ  
た**という性格的側面は強調しておきたい。

当時橋本左内から「燕趙悲歌の士」と思われたり、  
斉彬が「俺にしか使いこなせない」と言ったのはこのあたりのところであろう。

そういう西郷である。  
彼には、斉彬の超本物さがはっきりみえており、  
自分を取り立て育ててくれた斉彬の死に際し、  
本気で殉死を考えた程で、  
その死に関わったと思われ、また斉彬に較べれば一枚落ちる久光に対して、  
強烈にその裏返しの感情をもってしまった、ということであろう。

以心伝心、久光の方も、家来のくせに圧倒的な存在感があり、自分に対して愛嬌のない西郷を、  
心中小面憎く思っていた。